

今日、六月二十一日は夏至(げし)。日の出から日の入りまで、つまり、昼間の時間が一番長い日です。

「昼間の時間が一番長い」というのは、日本などがある「北半球」の話で、オーストラリアなどがある「南半球」では、昼の時間が一番短い日となっています。

北半球で、昼間の時間が一番長いのが夏至。逆に、昼間の時間が一番短いのが冬至(とうじ)です。(今年は十二月二十二日)。そして、夏至から冬至の中間の日を秋分の日と言います。今年は九月二十三日で休日。冬至と夏至の中間を春分の日と言います。今年は三月二十一日。休日ですが、立教小学校では毎年この日を、卒業礼拝の日としています。今年の六年生、つまり六十九回生が立教小学校を巣立つのは、春分の日という訳です。

秋分の日と春分の日は、ただの休日ではなくて、昼と夜の長さが同じ日だと言われています。実際は昼間の方が数分長いのですが…。

夏至よりも冬至の方が有名かもしれませんが、冬至の日には、ゆず湯に入ったり、カボチャを食べたりすることを知っている人がいるのではないかな。

夏至の日には何かを入れた特別なお風呂に入ったたり、何か決まった食べ物を食べたりというようなことはないようです。

ただ、関西では夏至の先の七月一日か二日

の半夏生(はんげしよう)と言われる日に、タコを食べる習慣があるようです。

ここでタコにまつわる不思議な話をひとつ。江戸時代、越後の国と言われた新潟県での話。文化九(一八一二年)、六月十六日に起きた本当の話と言われています…。

漁師の子どもの文四郎(十五歳)とその友達二〜三人で、海で遊ぼうとしていたところ、長さ一メートル五十センチほどの蛇を発見。その蛇を殺そうとして、棒で打ちかかると、蛇は海に逃げていく。文四郎たちは着物を脱ぎ捨てると海に飛び込み、蛇の後を追った。逃げる途中蛇は、海の中の岩角に度々体を打ち付けているので、文四郎たちは泳ぎながらそれを見て、変なことをするものだと思っ

白っぽく、少しも赤みが無いことと、足が八本ではなくて、七本だったとのこと。このあたりの漁村では、昔から漁師たちは七本足のタコを捕まえると、皆捨ててしまう習慣で、決して食べることはなかったそう…。江戸時代、滝沢馬琴さんたちが書いた『兔園(とえん)小説』にそう書いてあるのを、ええ、私は確かにこの目で見ました…。



おっと、いかん。横道にそれ過ぎてしまった。半夏生にタコを食べるのは、稲の根が四方八方にしっかりと根付くように、稲穂がタコの吸盤のように立派に実りますようにと、願いを込めてのことのようです。君たちもタコ、いかがですか。

なにっ、食べたくない。そう来ると思った。大丈夫。七本足のタコさえ食べなければいいのだから。えっ、丸ごと出てこなかったら、何本足か分からないって。うゝむ。

大丈夫。これは、江戸時代の話で、今のタコは進化しているはずだから。それにタコの名誉のために言うておくと、タコは動物の中でも有数の知能の持ち主。母親のタコは、それはそれは、愛情深い子育てをするのです。なっ、なにっ、余計食べたくなかったって！うゝむ。逆効果だったか…。

(立教小学校校長 田代 正行)